

まいごのかぎ

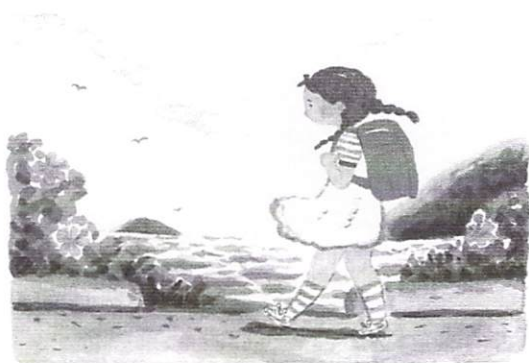
斉藤 倫作
陣崎 草子 絵

海ぞいの町に、ぱりっとしたシャツのような夏の風がふきぬけます。だけど、学校帰りの道を行くりいこは、うつむきがちなのです。

「またよけいなことをしちゃったな。」

りいこは、しょんぼりと歩きながら、つぶやきました。

2 三時間目の図工の時間に、みんなて学校のまわりの絵をかきました。りいこは、おとうふみたいな



こうしゃが、なんだかさびしかったので、その手前にかわいいうさぎをつけ足しました。そしたら、友だちが、くすくすわらったのです。

りいこは、はずかしくなって、あわてて白い絵の具をぬって、うさぎをけしました。そのとき、りいこの頭の中にたしかにいたはずのうさぎまで、どこにもいなくなった気がしたのです。うさぎに悪いことをしたなあ。思い出しているうちに、りいこは、どんどんうつむいていって、さいごは赤いランドセルだけが、歩いているように見えました。

3 ふと目に入ったガードレールの下のあたりに、かたむきかけた光がさしこんでいます。もじゃもじゃしたヤブガラシの中で、何かが、ちらっと光りました。

「何だろう。」

りいこが拾い上げると、それは、夏の日ざしをすいこんだような、

感想
絵の具
悪い
ヤブガラシ
拾い上げる



こがね色のかぎでした。家のかぎよりは大きくて、手に持つほうが、しっぽみたいにくるんとまいています。

「落とし物かな。」

そう、小さく、声に出しました。すると、かぎは、りいこにまばたきするかのようになり光りました。

4 りいこは、元気を出して顔を上げました。落とした人が、きつとこまっているにちがいない。帰り道の方角とはべつの、海へにある交番に向かって、ゆるい坂を下りはじめました。

5 坂道にならんだいくつもの家をながめながら、このかぎは、どんな人が落としたのかなあと、りいこは、あれこれ思いうかべました。

6 通りぞいにある、大きなさくらの木は、青々とした葉ざくらになっていました。その木のねもとを見て、りいこは、びっくりしました。

「あれは、何だろう。なんだかかぎあなみたい。」

7 しぜんに空いたあなではなく、ドアのかぎのように四角い金具が、みきについていて、そのまん中に円いあながあるのです。

「もしかして、さくらの木の落としたかぎだったりして。」

8 まさか、ね、と思いつながら、持っていたかぎをさしこんでみます。すると、すいこまれるように入っていく、回すと、ガチャンと、音がしました。



持つ
向かう
坂

金具
円い

「あつ。」

思わず、さげびました。木が、ぶるとふるえたのです。そうして、えだの先に、みるみるたくさんのつぼみがついて、ふくらんでいったかと思うと、ばらばらと何かがふってきました。

「どんぐりだ。」

りいこは、悲鳴をあげます。さくらの木に、どんぐりの実がつくなんて。おさげの頭にコンコン当たるとんぐりを、ランドセルでふせぎながら、あわててかぎをぬきました。どんぐりの雨は、

びたりとやみ、さくらの木は、はじめの葉ざくらにもどっていました。

「びっくりした。」

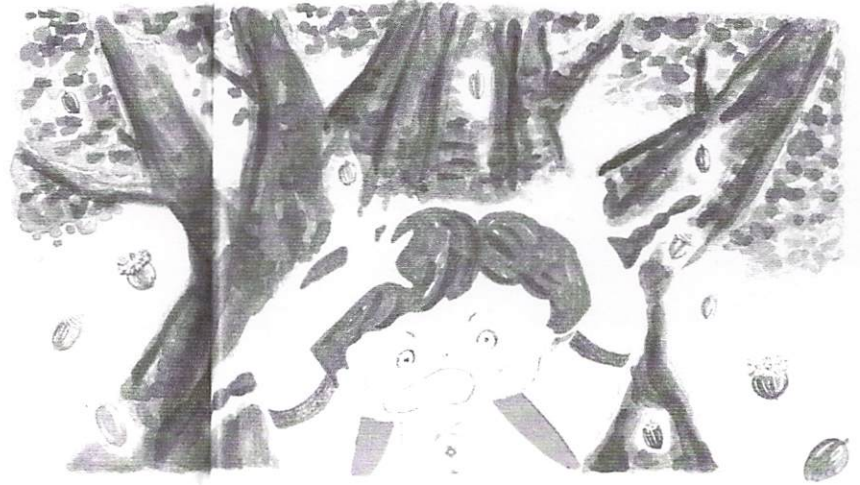
りいこは、道の方に後ずさりしながら、言いました。

「こんなことになるなんて。さくらの木のかぎじゃなかったんだ。」

今日は、通りぬけるだけ。公園があります。よく遊んでいる場所ですが、ろが、緑色のベンチの手すりに、小さなあなが空いているのです。

「なんだか、あれもかぎあなに見えるんだけど、そんなはずないよね。」

りいこは、だれにもなくつぶやいて、通りすぎようとします。けれど、ふと立ち止まってしまいました。



悲鳴



「でも、もしかして——。」

10 カチンとかぎを回す音が、あたりにひびきました。ベンチは、四本のあしをぐいと伸ばし、大きな犬のように、せなかをそらしました。

「わあ。」

りいこは、ひっくり返りそうになりました。日かげにいたベンチは、のそのそと歩きだすと、公園のまん中の日だまりにねそべり、そのままねいきを立てはじめました。りいこは、びっくりして見ていましたが、しのびよると、

歩道



かぎをぬきとりました。ベンチは体をふるわせ、りいこの方を、なんだかうらめしそうにふり返ってから、元いた所に帰っていきました。

「ベンチのかぎでもないよね。歩くなんて、おかしいもの。」

りいこは、ためいきを一つついて公園を後にしました。坂を下ると、大きな国道にぶつかります。その向こうには、海がきらきらと光っています。

// 交番までは、もう少し。おうだん歩道をわたるとしおのかおりがしてきます。道のわき



という字の「バ」の点が、なぜか三つあるのです。その一つが、かぎあなに見えました。

「どうしよう。」

りいこはまよいました。よけいなことはやめよう。そう思ったばかりです。

そのとき、点の一つが、ばちっとまたきました。

「これで、さいごだからね。」

12 じっくりりいこは、かんばんの前でせのびをしていました。カチンと音がして、かぎが回りました。ところが、



何もおこりません。

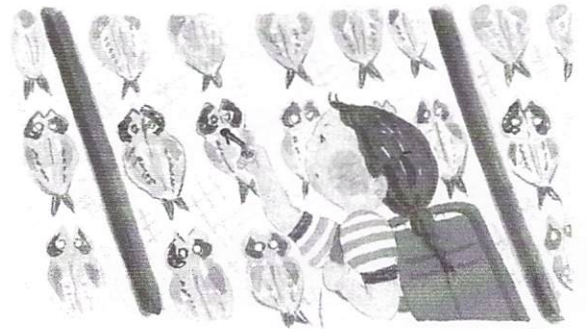
13 ほっとしたような、がっかりしたような気持ちで、バスの時こく表を見て

りいこは「あっ。」と言いました。数字が、ありのように、そろそろ動いているのです。五時九十二分とか、四十六時八百七分とか、とんでもないとうちやく時間になっています。

「すごい。」

りいこは、目をかがやかせました。でも、すぐに、わくわくした自分がいやになりました。りいこは、かぎをぬき

5 92... 125
6... 3
11 7420
46 807
1 9...
8 5...
や



にあみが立ててあり、魚の開きが一面にならべてありました。りようしさんがあじのひものを作っているのです。そばを通るとき、中の一びきに、円いあなが空いているのに気がつきました。

「お魚に、かぎあななんて。」

14 へんだと思いつながら、見れば見るほど、やはり、ただのあなではなさ

そうです。いつしかすいこまれるように、かぎをさしこんでいました。

15 カチャツ。たちまち、あじの開き

は、小さなかもめみたいに、はばたきはじめます。あつけにとられているうちに、あじは、

目の前でふわふわとうかび上がりしました。

16 りいこは、あわててとびつき、かぎを引きぬきました。開きは、元あみの上に、ぼとりと落ちました。

「あぶない。海に帰っちゃうとこだった。」

17 わたし、やっぱりよけいなことばかりしてしまう。りいこは、悲しくなりました。早く交番にとどけよう。

18 海岸通りをいそぎはじめたとき、ふとバスでいのかんばんが目に入りました。「バス」



•海
•悲しい

とりました。

「あれ。どうして。」

時こく表の数字は、元には、もどりませんでした。

19 りいこは「さわくなつて、にげるようにかけだしました。交番のある方へすなはまを横切ろうと、石だんを下りかけると、国道のずっと向こうから、車の音が聞こえてきます。ふり向くと、バスが十何台もおだんごみたいにぎゅうぎゅうになって、やって来るのです。

「わたしが、時こく表をめちやくちやにしたせいで。」

20 どうしよう。もう、交番にも行けない。

おまわりさんにしかられる。りいこは、かぎをぎゅつとにぎりしめて、立ちすくんでしまいました。

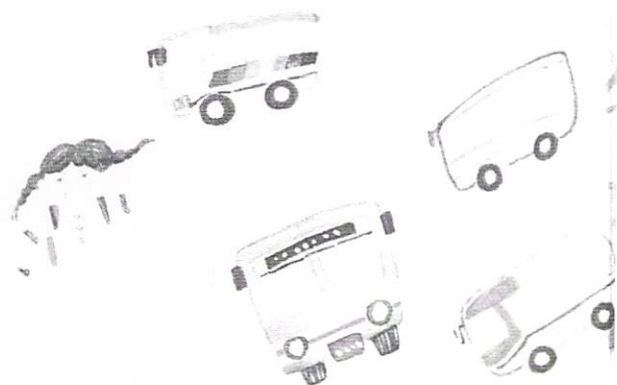


21 きみのようなことは、さらにおこりました。

つながつてきたバスが、りいこの前で止まり、クラクションを、ファア、ファア、ファーン、と、がっそうするように鳴らしたのです。そして、リズムに合わせて、くるくると、向きや順番をかえはじめました。りいこは、目をばちばちしながら、そのダンスに見とれていました。

「なんだか、とても楽しそう。」

22 そして、はっと気づいたので。もしかしたら、あのさくらの木も、楽しかったのかもしれない。どんぐりの実をつけ



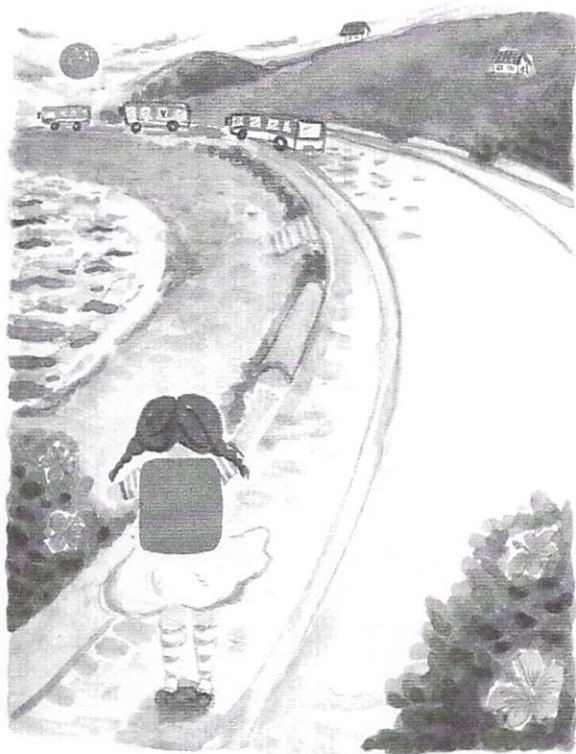
たのは、きつと春がすぎても、みんなと遊びたかったからなんだ。ベンチも、たまには公園でねころびたいだろうし、あじだつて、いちどは青い空をとびたかつたんだ。

23 「みんなも、すきに走つてみたかつたんだね。」

しばらくして、バスはまんぞくしたかのようになり、一台一台いつもの路線に帰つていきました。そのとき、一つのまどの中に、りいこはたしかに見たのです。図工の時間にけしてしまつた、あのうさぎが、うれしそうにこちらに手をふつてゐるのを。

24 りいこもうれしくなつて、大きく手をふり返しました。にぎつて

いたはずのかぎは、いつのまにか、かけも形もなくなつていました。りいこは、夕日にそまりだした空の中で、いつまでも、その手をふりつづけていました。



路線

斉藤 倫

一九六九年、秋田県生まれ、詩人、作家。『せなかな』、『すつと』、『どうだい』などの作品がある。